



徳島

ふし

冬

中村俊定文庫
文庫 18
520
4



行



一尾伝ハ
三國ハ
大山ハ
田一ハ

名ハ
姓ハ
御所ハ

馬方ハ
冬ハ
同ハ

大とこら

ふあ

つら

つら

一尾伝ハ

つら

風ハ

つら

白

つら

つら

定

名ハ

つら

一

つら

馬

つら

送

つら

尾

雀

つら

花弁了 不及解
霜ノ一字骨

印多々了
百々おぼろに何れ
あつたりやうと
のくすくす

埋タラ了

あつたりやうと
と古夏人の字うと
ゆめめめめ
唐ノ半橋とて名
若と今を言ふ人
と何れやうと

花開や左友をりて
かりしは往をりて

印多々や何れの子の
明く悔しき所をりて

曲も旅館

埋タラや思ふと名
明の縁をりて

唐ノ半橋とて名
若と今を言ふ人
と何れやうと

か年と失くす

埋タラもやう
新れは思ふ

いめと今
さう旅れ富り
さう居ると

住つた
あつたりやうと
と古夏人の字うと
ゆめめめめ
唐ノ半橋とて名
若と今を言ふ人
と何れやうと

住つた
あつたりやうと
と古夏人の字うと
ゆめめめめ
唐ノ半橋とて名
若と今を言ふ人
と何れやうと

あつたりやうと
と古夏人の字うと
ゆめめめめ
唐ノ半橋とて名
若と今を言ふ人
と何れやうと

あつたりやうと
と古夏人の字うと
ゆめめめめ
唐ノ半橋とて名
若と今を言ふ人
と何れやうと

霜の夜
あつたりやうと
と古夏人の字うと
ゆめめめめ
唐ノ半橋とて名
若と今を言ふ人
と何れやうと

あつたりやうと
と古夏人の字うと
ゆめめめめ
唐ノ半橋とて名
若と今を言ふ人
と何れやうと

あつたりやうと
と古夏人の字うと
ゆめめめめ
唐ノ半橋とて名
若と今を言ふ人
と何れやうと

定行の候
右二季
のあはれ
乃季
のあはれ

夜はさくら
夜はさくら
夜はさくら
夜はさくら

定行の候
乃季
乃季
乃季
乃季

定行の候
定行の候
定行の候
定行の候

定行の候
定行の候
定行の候
定行の候

定行の候
定行の候
定行の候
定行の候

定行の候
定行の候
定行の候
定行の候

定行の候
定行の候
定行の候
定行の候

定行の候
定行の候
定行の候
定行の候

定行の候
定行の候
定行の候
定行の候

續山井

乃季

月の肩小
乃季

乃季
乃季

乃季
乃季

乃季
乃季

乃季
乃季

乃季
乃季

乃季の
乃季の
乃季の
乃季の

乃季
乃季
乃季
乃季

書傳
多行福神奈の臣

書傳 研考す 行 名を以

交運し身りと死す二の類の書傳とて出入り功をとも何れ
は長し神も困りし神 狂言を始り次は功をとも何れ
下の書は誰従也 凡そ今や一功ありし功をとも何れ
年傳をたにのしし神 功ありし功をとも何れ
不詳も 幸世 祝のし各々 高人が高人が高人が
りとのひりしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
新しす百也し一浅も高とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
新しす 高のひりしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

小 春 足 り ぬ 浪 の 気
重陽の事と神ありし説は
九月九日は唐と日本と盛
冬に希しあつた冬に
庭中露土天徘徊ひ
西の乱は往まの夜底
秋の紅葉は
三州

振るれ雁 哀し 書傳

三州 白雪とて名あり人

三州 白雪とて名あり人

新しす 画 画の体

新しす 小坊とて名あり人

重九の 大根受
重九の 大根受
重九の 大根受
重九の 大根受
重九の 大根受

重九の 大根受
重九の 大根受
重九の 大根受
重九の 大根受
重九の 大根受

貞徳 名 賢

新しす やろろ 翁の 九頭中

三州

長し 年の 夜の 感

三州

小 仙 や ぬい 清き しの けり

三州

平の こと 多し 月とて 玉

三州

三州 白雪とて名あり人

三州

珍細の
 其角
 声柄
 劣の目
 夕
 貧山の谷
 多作
 門の撃
 寢石
 貧山と代

驚しつゝ
 穢し日之れ
 何極けや
 下戸も
 作見
 何
 珍細の
 指さ
 貧山の
 愁も

佛士有とて
 上買骨別書
 而鳴益氣

霜降月の
 のも
 刀
 霜降月の
 のも
 刀

舟の
 病中
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟
 舟

月舟の
入るの
身心
...

宇神
...

月舟の
...

...

...

雁
...

...

...

...

大和
...

...

...

...

...

...

...

...

...

自
...

...

...

...

...

...

...

つれの竹内をいふれども
後の序のよき一節
厨のくまもあつて
つよあつたりけれん

標橋早頃をいふ保美の早
年とくらしのあつた

十名

つれの竹や年をいふれども
坊の序も氷の流るる

つれの竹や門をいふれども
そなたのいふ人

つれの竹や聖の序のあつた

里の序もいふれども
つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども
つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども
つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども
つれの竹やいふれども

あ
あ
あ
あ
あ

つれの竹や
深川大橋の序
つれの竹や

つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や

深川大橋の序

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

つれの竹やいふれども

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や
つれの竹や

口の唇をこし馬も舌の上
かれ手の中も誕生馬鹿

卒に於ては少少可憐

雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり

雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり

雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり

雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり

雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり

雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり

雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり

雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり
雪のり

川のほとりへ来て ぼんやり

とほろり 坐るなり 夕

霧交りの朝 霧のこぼれ

年の復の暮 昏 夕

わがわがをいふ人々の
ほろりもさし人知れぬ
人をも揺るといふは
一上り水月之夜の
友の暮ももつとや
よもいれぬ秋の
今と昔の戸の
又と昔の戸の
おんや
ほのけは ぬれぬ
定まる 暮れ 暮の夕

月日の
子路者孔子の
子曰魯將而海隨
或者夫由歟子路聽
之悦

月日の 師走の 風 夕
月日の 師走の 風 夕
月日の 師走の 風 夕

見れ十日 又家
為親 後衛 龍君
下客 後衛 龍君
古く 魚 双り
常 名 之 物

生れ 愛 情
此れ 愛 情
生れ 愛 情
此れ 愛 情

方にはねて... 申根好忠 五月廿の年の...
 報恩短日二月十五日... 未行ま品... 計...

年... 辰... 辰...
 辰の併...

西... 辰...

辰... 辰...

辰... 辰...

辰... 辰...

此のいふことばと云ふこと思ふに、此れは、
そのいふことばと生れ、
さうやと云ふのは、
さういふことばと云ふのは、
さういふことばと云ふのは、
さういふことばと云ふのは、

分別の庭より、

情いづみの、
純け

柞新賛

柞の作の、
柞の作の、
柞の作の、
柞の作の、
柞の作の、
柞の作の、
柞の作の、
柞の作の、
柞の作の、
柞の作の、

け、
四季の、
降、
花、

花、
花、
花、
花、

花、
花、
花、
花、

花、
花、
花、
花、

花、
花、
花、
花、

花、
花、
花、
花、

此のいふことばと云ふこと思ふに、
論、
論、
論、
論、
論、
論、
論、
論、
論、
論、

大乗の、
前車、
後車、

元禄七甲戌冬十月八

病甲喰

猿〜布〜
布〜布〜枯也と
死〜る〜心 井
再々
枯〜と〜序〜可見六

猿〜布〜
か枯也と
ゆも力わきいぬまのり
夢

附録

和哥〜京極黄門乃贈答を記すは佛修の
習勝多の一件を〜ん文と悔しけ 後〜所
有文字れ〜人〜し真々修義乃尾片人
所〜に四所の并後如之及〜る〜

本歌如き

贈答を〜洋

新古今
〜の〜の〜の同〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の

人丸
定家
良權
定家
五郎
定家

おのゝり人のしほしつゝののち 宗因
しらふしつゝ無んしつゝのち ぶつ
しらふしつゝ無んしつゝのち 季吟
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 貞室
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 剛夷
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 本因
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 奉堂
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少

阿まうふふ人のちのちのち 去来
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 具角
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 嵐雪
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 鬼堂
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 許六
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少
しらふしつゝ無んしつゝのち 近少

朽 之 也 又 殊 の 事 な れ 結 解	す ま ま や 凡 又 の 事 な り け り	名 日 や ま い な れ 生 計	挽 は し ま る ま る の 月 之 事	好 舟 の 結 わ り わ り し 也	り し と 好 舟 を め り し 也	馬 呵 の 昔 も 好 舟 の 事 な り し	草 草 も な れ 好 舟 の 事 な り し	好 舟 の 事 な り し と 何 也	よ し ま ま ま な れ 好 舟 の 事 な り し	好 舟 の 事 な り し と 何 也	好 舟 の 事 な り し と 何 也	好 舟 の 事 な り し と 何 也	好 舟 の 事 な り し と 何 也	好 舟 の 事 な り し と 何 也	
又考	この	本節	この	正秀	この	曲承	この	この	この	この	この	この	この	この	この

此 心 中 の 想 は ま ま や 唯 好 舟 の 事	其 の 如 く 信 深 く し こ の 事	心 も 好 舟 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	好 舟 の 事 を 好 ま る 事	
曾良	この	千那	この	杉凡	この	木十由	この	路通	この	桃陸	この	この	この	この	この	この

此の所や本舞はしく少後
 不ト
 恥ゆるりいと新しく心寄る
 少少
 毛々三節是しし又々呼まき
 西節
 是の中ふあはさきしし
 此
 乃所只直如う 向る一
 一欠
 江津少ト
 此
 きりくも我形きり 咄ハ
 此
 派しはちしと名かりりト
 此
 此れ一炭取じ手ふやけり
 一唱
 唐人多しあきりりや此れと
 此
 新もさききりり此れり
 昌房
 川下ヤ棟し知し三折のむ
 此

事はくもきりり如行
 如行
 通きりり名仲のきりり
 此
 きりりヤニ名の中りきりり色
 尚白
 史記や高し姓と捨る
 此
 此のころ史や知しと同し
 越人
 史や得し買丸声と姓
 此
 太平のころのいり 糸織
 昔中
 ちりふもし味さしり
 此
 易名も得し画し
 藤守
 けきりり名仲之きりり
 此
 用しりり名の次ちりり
 此
 風のりりりきりり 二日月
 此

八月一日〜江戸〜
 八月二日〜江戸〜
 八月三日〜江戸〜
 八月四日〜江戸〜
 八月五日〜江戸〜
 八月六日〜江戸〜
 八月七日〜江戸〜
 八月八日〜江戸〜
 八月九日〜江戸〜
 八月十日〜江戸〜
 八月十一日〜江戸〜
 八月十二日〜江戸〜
 八月十三日〜江戸〜
 八月十四日〜江戸〜
 八月十五日〜江戸〜
 八月十六日〜江戸〜
 八月十七日〜江戸〜
 八月十八日〜江戸〜
 八月十九日〜江戸〜
 八月二十日〜江戸〜
 八月二十一日〜江戸〜
 八月二十二日〜江戸〜
 八月二十三日〜江戸〜
 八月二十四日〜江戸〜
 八月二十五日〜江戸〜
 八月二十六日〜江戸〜
 八月二十七日〜江戸〜
 八月二十八日〜江戸〜
 八月二十九日〜江戸〜
 八月三十日〜江戸〜
 九月一日〜江戸〜

八月一日〜江戸〜
 八月二日〜江戸〜
 八月三日〜江戸〜
 八月四日〜江戸〜
 八月五日〜江戸〜
 八月六日〜江戸〜
 八月七日〜江戸〜
 八月八日〜江戸〜
 八月九日〜江戸〜
 八月十日〜江戸〜
 八月十一日〜江戸〜
 八月十二日〜江戸〜
 八月十三日〜江戸〜
 八月十四日〜江戸〜
 八月十五日〜江戸〜
 八月十六日〜江戸〜
 八月十七日〜江戸〜
 八月十八日〜江戸〜
 八月十九日〜江戸〜
 八月二十日〜江戸〜
 八月二十一日〜江戸〜
 八月二十二日〜江戸〜
 八月二十三日〜江戸〜
 八月二十四日〜江戸〜
 八月二十五日〜江戸〜
 八月二十六日〜江戸〜
 八月二十七日〜江戸〜
 八月二十八日〜江戸〜
 八月二十九日〜江戸〜
 八月三十日〜江戸〜
 九月一日〜江戸〜

起りて言ふ所をいとや
 岩にひくくせぬあはれ
 音のゆく道も心に
 心取まひ夜に人の
 一めたにわかき
 更しくつてなれ
 又ひくくせぬ
 悟りてあはれ
 口ぬけふあはれ
 蝉の音や夜を
 舟にまふあはれ
 舟にまふあはれ
 舟にまふあはれ

鬼士
 石少
 里江
 石少
 已許
 石少
 白龍
 石少
 石少
 石少
 石少
 已許
 石少

跋

如是文開佛の聞法不忘見敬得大慶即文善
 親友也の之と仰道は厚い朋の多し滑紙也
 滑讀而如字の直に隨而袒師翁の正風
 の之と仰と耳に入るは過現未も一服の
 関因るるゆゑも此のまゝは終身大志
 句読を幾智能入る言とわくはん、全く
 滑讀の罪とぞなす

芭蕉翁古門人曰る要法と奉ははりて
 句解も正門の裁事と奉ははりて親友
 園せやまとの本まのまゝにわくらん
 多く人々と克ちて袒師翁の或は結
 古代の書に載る瀧乃自然な件と奉
 是れは自然な件と奉ははりて

唇をよくと示入るやこのみ程の心ゆく紅と赤
槐のうきあきく其類と信じて一板の艶紅
水昔のゆれに那移の存とありけり
見しむ解の虚とぬれぬれに此紅のす
かしくも移りの情さる無幸同好と
説一世捨身乃旅多し衣裏宝珠と出せば
ぬれ嘉言言集行仰くは會祖師翁の像と
と換り終と慎と遠と信所は多るに
乃明也く安うきるも
宵の移れぬと歎ぬれ平生往まほそ
忘ぬるぬ羨もぬの安心し信くは益も
夫の在りぬり
神職のまかり
誹謗れ

今集の遠祖人の名を天文八年八月廿日
二十五年いへく辞世に吉ぬれぬれ
成り歌多し又ハ申す伊波の寄りの紅
寧ろ二百余のの後のもろそ
知人並にたりゆや中古御所
二年癸巳十月十日いへく辞世に
元の孝侍の心の玉けりけり
此二史神仏不念降心に
豊秋の深い負徳に
因縁も辨せ
後集の
誰れし御の
元祿七甲戌の十月十日

前五十部

卷數二百冊

此過去種々大般若書等のいふ
ちんぬんたるは 前志より
取越人むさし類進して先
縁者より書かざる令んを思ふ
謝す而後此中の人々
を以ていふは走直電り過多
なり

丁六杯 野人

